

和歌と俳句でたどる「月の都さらしな」年表

Ver. 2022/11/12
作成 さらしな堂

奈良平安	905	わが心慰めかねつさらしな姨捨山に照る月をみて(古今和歌集、よみ人知らず)
平安前期		竹取物語の「月の都」
中期		見るほどぞしばし慰むめぐりあわむ月の都ははるかなれども(源氏物語・須磨) われかくて憂き世の中にめぐるとも誰かは知らむ月の都に(源氏物語・手習)
応保2	1161	誕生
	1169	誕生
	1180	福原遷都
	1181	平清盛没
	1185	平家滅亡
	1186	九条兼実が摂政
	1187	西行没(2月16日)
建久元	1190	良経妹任子、後鳥羽天皇に入内
建久4	1193	六百番歌合、良経の名歌 吉野山花のふる里跡絶えて空しき枝に春風ぞ吹く(新古今収載) 見し秋を何に残さむ草の原ひとつに変わる野辺のけしきに
建久6	1195	伊勢公卿勅使 神風や御もすそ河のそのかみに契りしことの末をたがふな み吉野は山も霞て白雪のふりにし里に春は来にけり(治承題百首)
建久9	1198	左大臣に昇進
正治元	1199	妻一条能安女没(34歳)
正治2	1200	正治初度百首(後鳥羽院初主権、良経が歌壇の中心に) 天つ風みがきて渡るひさかたの月の都に玉やしくらむ(隣に次の歌) 更級の山の高嶺に月さえてふもとの雪は千里にぞしく
建仁元	1201	更級や姨捨山の薄霞かすめる月に秋ぞこもれる 和歌所寄人(よりゆうど)、新古今撰集下命 撰政に任ず
	1202	俊成九十歳祝いに詠む(秋篠月清集祝部) 老いらくの今日来む道は残さなむ散りかひ曇る花の白雪
	1203	「秋篠月清集」完成
	1204	「新古今和歌集」完成
	1205	巻頭「み吉野は山も霞て白雪のふりにし里に春は来にけり」 没(38歳)
	1206	
	1207	
3	1215	眺めつつ思ふも寂し久方の月の都の明方の空(藤原家隆) ながむれば衣手かすむひさかたの月の都の春の夜の空(源実朝) 秋の夜の月の都のきりぎりす鳴くは昔の影や恋しき(源実朝) 九重の雲居をわけてひさかたの月の都に雁ぞ鳴くなる(源実朝) 月見れば衣手さむしさらしなや姨捨山のみねの秋風(源実朝)
安貞元	1221	承久の乱
	1227	息子の為家が信濃国務
	1230	このころ「更級日記」書写
貞永元	1232	関白左大臣家百首 なぐさまずいづれの山も住なれしやどをばすての月の旅寝は 新勅撰和歌集編纂、百人一首
	1235	没(80歳)
戦国	1241	帰ってくる月の都に秋はまだころを旅の空のかりがね(足利義政)
江戸		さらしなや雄島の月もよそならんだ伏見江の秋の夜の月(秀吉) これはこれとはばかりの花の吉野山(安原貞室、北村季吟の師匠) 更級も吉野もよしや月花にこれもはなれぬ雪の夕映え(北村季吟II芭蕉の師匠、天和2年II1682「和歌八幡十景」) 佛や姨ひとりなく月の友、十六夜もまださらしなの郡哉、元日は田毎の日こそ恋しけれ(芭蕉、更科紀行の旅II1688) 面影塚建立(加舎白雄、明和6年II1769) 佛や月の都はゆきはる(宮本虎杖、天明3年II1783) 一夜さはわれさらしなよさらしなよ(小林一茶) さらしなは右みよしのは左にて月と花とを追分の宿(1827年以前の作、軽井沢追分の分去れ碑) 旅なれや月の都に月の秋(嶋立庵雄啄、天保7年II1836) 君が代に月の都と言ふべきはこの更級の姨捨の山(塚田雅文・更級村初代村長、1889II M22) 久方の月の都は信濃なる冠着山の峯にこそあれ(塚田雅文) 今よりは人に誇らんいにしへの月の都の月を見つれば(大和田建樹) この舟をあがれば月の都かな(水野竜孫) 久方の月の都を人とはば雲の上なる冠着の山(佐藤寛) 更級の月の都に来てみれば名にも勝るとなほ思ひけむ(交野時万) 仰ぎ見れば羽衣干してなり光り月の都の冠着の山(藤野静輝、1900II M33) 正岡子規の小説「月の都」(1892年、26歳) 鶴鳴いて月の都を思ふかな(正岡子規)
明治		「姨捨山の文学」(矢羽勝幸著)で章題として「月の都」 芭蕉も恋する月の都千曲市(すぎ大和氏、観光×キャッチフレーズとロゴマーク) 千曲市、「月の都」として日本遺産
昭和	1988	
平成	2011	
令和2	2020	